

伊良子清白新出資料その他

阪本幸男

はじめに

筆者は三重県における近代短歌史研究の基礎作業として、明治三十年前後から昭和二十年にいたる期間、県内で発行された短歌を主とした文学雑誌、『伊勢新聞』、個人、合同歌集等を調査した。その結果は「三重近代短歌史年表稿」と題して、『松阪女子短期大学論叢』第27号（平成元年）に掲載した。続いて県内発行の歌誌および中央の主要短歌結社誌別に、三重県在住者の出詠状況を、また明治大正期の投書雑誌や大正昭和期の短歌総合誌の本欄寄稿者、読者短歌欄投稿者についても調査した。こうした調査のなかで、かねてから関心を抱いていた伊良子清白の作品に接するつど、これを記録収集しておいた。

清白の研究成果として刊行されたおもな著書に楠井不二氏『評伝伊良子清白』昭和四十六年。山路峯男氏『日本近代文学大系53・近代詩集I』中「伊良子清白集」昭和四十七年、『伊良子清白研究』昭和五十一年。杉谷寿郎氏「伊良子清白作品集」全八編『商学集志（人文科学）』昭和四十六～五十一年。昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書58』中の野々村三枝氏「伊良子清白編」昭和六十一年。橋爪博氏「伊良子清白の研究」平成十二年がある。

筆者は手許の清白作品から、前記五氏の著書に見当らなかつたものを新出資料として紹介しようと思う。作品は年代順に配列したが、掲載紙誌が同じ場合はまとめて配列した箇所もある。

漢字は常用漢字のあるものはそれを用い、踊り字は一部を除き
通行の表記に改めた。新出資料についての注は末尾に一括して
記した。

なお、付記として、諸氏によって紹介済みの作品に補助的な
説明を加えた。

新出資料

資料一 「文藝倶楽部」臨時増刊千紫万紅 春の巻 第四卷第

四編 明治三十一年三月二十三日発行

懸賞新詠詩 大町桂月先生選

題 春の野 (天位)

京都 S. S.

咲、き、て、は、木、々、の、花、を、彫、り、
萌、え、て、は、草、に、彩、紋、を、お、く、
春、野、よ、な、れ、が、細、指、に、
鋭、利、き、鑿、の、香、あ、り、

天津乙女か雲の上に、

さへづり飽かぬ鳥の歌。

春、野、よ、な、れ、が、紅、唇、に、
妙、な、る、楽、の、ひ、び、き、あ、り、

氷、れ、る、虚、空、を、温、め、て、
息、柔、か、き、薄、が、す、み、
春、野、よ、な、れ、が、眼、ざ、し、に、
溢、る、愛、の、光、あ、り、

う、か、る、胡、蝶、は、風、に、舞、ひ、
群、が、る、蜂、は、花、蜜、に、酔、ふ、
春、野、よ、な、れ、が、乳、房、に、
味、美、き、酒、の、泉、あ、り、

何、を、は、ち、ら、ふ、久、方、の、
月、読、男、お、ほ、ろ、に、て、
春、野、よ、な、れ、が、柔、肌、に、
た、の、し、き、夢、の、宿、あ、り、

評 能く若菜集を読める者、庶幾くはこの手腕を以て藤村
よりも大なる詩人を学べ。

資料二 『むれ星』第四卷第二号 昭和六年二月一日発行 署

名は伊良子清白（以下すべて同様のため省略）

若布採り

嶋の二月は

若布採り。
若布採り。

若布採る日の

寒風に、

海はちらちら

雪催ひ。

わかめ苳るとて

鎌次げて、

すげた鎌の双

船首にひかる。

夜明け千鳥の

磯めぐり。

嶋の二月は

若布採り。

雪の降る日の

薄くらがりに、

つめたい覗き箱

波が越す。

やんれ、波越す

船ばたに、

あがる若布の

浅みどり。

涙垂るやうな

うしほの雫。

嶋の二月は

若布採り。

山は南うけ、

なぞえのほし場。

伊良子清白新出資料その他（阪本）

若布かけたよ、

日和雲。

風も眼を持つ

繩のはし。

まだ如月の

日脚は早く。

わかめほす手の

やれさて忙し。

（原）註 覗き箱は四方を硝子張りに密閉した蠡燈がたの箱、

海底を窺ふに用ふ。

資料三 田中稲花『歌集 稲花集』 志摩郡浜島町 稲花会

昭和十三年八月二十日発行

（追悼歌）

人間は悲しきものとおもほしてげにたふとくも生きたまひけり

千萬の神のさだめし皇国とかしこみましきあしたゆふべに

珍宝瑞穂の米を稔らする田中の稲の花といふ御名は

信深く心は篤く和やかに生きの生命を育みし君

希に見る世の至り人わが前にいまも師の如ただにいたたす

資料四 『厳櫃』（奈良県 厳櫃社）

イ、第九十六号 昭和十四年三月一日発行

漁村朝夕

ひのひかり海にのぼりて時のまい^(マ)焰流せり冬のはまべに
かぎろひの夕かたまけて海のいろはげしくかはる冬の浜辺に
春浅き荒磯の布海苔細々と生えてかがやく潮の底^(そ)入りに
裾からげ女わたり来荒磯には布海苔生えたりいまだをさなし
寒念仏の軀等すぎてくれかかる門辺にパンを打つこともあり

口、第百一号 昭和十四年八月一日発行

うなぎ釣り

梅雨上り夜の雲白し築岸の石垣のひまのうなぎ釣るをとこ
梅雨霽の霧の月夜に潮流れ鰻の穴釣りへたばる如し
この村の銭湯帰り裸にて月夜の穴釣りと涼しく語る
穴求食り岸もとほれる物の音村のともし火淡々し今
月夜更け築岸高し風の音潮ひきにけりかへる穴釣

資料五 『伊勢新聞』 昭和十四年四月二十四日発行

冬より春へ

あたたかき時雨は降りて冬の陽のあからさまにも射せる寺庭
(冬三首)

鉢植の寒木瓜の花紅の造り花めき菓子にさへ似る

すぎし年に餅法度のことありしがことしはなぜか杵の音しげ
し
瓶^(びん)に挿す椿の花の落ちし音けたたましさに昼をおどろく(春
昼)

やはらかき春日流るる堂の屋根雑草めぐみはつはつにみゆ

資料六 印田巨鳥編『手向草』(私家版) 昭和十五年十月一

日発行

巨鳥君の母君をいたみまつりて

きみの母とわれのおもへばきみのことおもほゆるものをあは
れ失せたまひぬとか

親と子のきづなはかなしきみの涙母のみたまをきよめたまふ
か

大空にこよひふるばかり星いでて君をかなしめつわれもかな
しむ

資料七 『白鳥』(鳥羽)

イ、昭和九年四月号

震災記念に十年前よりふつりと煙草をやめしと語るわが友

(題詠煙草二首)

卷煙草の吸殻火鉢に林立し客の帰りしあとの空しさ

田のおももの日あたり水にうきうきて尾をふるあはれ稚な蛸蚪かへもこ

(雑詠二首)

谷の瀬の流れがつくる岸の風川下に見えて鳶尾花いちはつのゆれ

口、昭和九年十月号

祝白鳥短歌会壹百号

昼さざりしわれを思へば百号にみちし白鳥に愧づるところあり

百号より貳百号より五百号にのぼさざればやまじとぞする

わが歌の会をこそぞりて天を衝く意気ありといはずやも百号を

こゆ

菊の歌

やせて咲く岸の山菊川上の方にとよみて水たぎちくる

縁におく鉢の白菊さかり久し花びらの秀はは裂けて箭形に

下心こころづ買はぬつもりにふみたふせし縁日の菊はたと負けたり

さしなみの隣がつくる鉢の菊本葉もとばの育ちただに語るも

心足の百姓ならし汽車ゆ見ればいささかの庭に菊作りたる

伊良子清白新出資料その他(阪本)

資料八 三重県翼賛歌人会神都地区歌会詠草 昭和十七年〜同

十九年

昭和十七年六月例会

向谿むかたにになく田蛙か村こえて声はきこゆるこの高所たかに

三つ島に釣る鱧船きすは夕茜海にひろごる時も動かず

雲払ふ山辺の風は雨すぎし園の若木の松を吹きこす

昭和十七年七月例会

朝曇南因幡の太蘭田ふたみだに水せせらげる故郷に來し(鳥取県帰省)

草山の茂みの中に一本の釣鐘草を汽車に見てすぐ

昭和十七年八月例会

秋涼し水車しぶきて川沿ひは朝さやけく白木樅さく

野は秋の黍の高穂に雲浮びひそけき昼をばつた飛ぶ音

昭和十七年九月例会

秋彼岸日ねもす叩く鉦の音に今日は爆ぜはたる寺の柘榴か

この夜頃月澄みまさる厨辺の壁のくづれに來て鳴く蟬いとと

昭和十七年十月例会

ソロモン海峡わきたちとよむ波の穂に焔捲き沈む午後十一時
五十分（ソロモン夜襲海戦）

一志野の豊けき穂波わがこころ拝がまほしく汽車に見てすぐ
（豊稜を祈る）

昭和十七年十一月例会

水漬田のさざら薄氷風うすひらにうごき岸辺波うち日はくれんとす

荒畠の根上り大根霜さやぎ風のおとなひ冬となりぬる

入りつ江の朝の漣かたよりににぶき雲間の陽は映り居り

向つをのこなたの岡の榛原田をこえてあたる冬日の光

山に入る小径は寒し冬岡の枯芝の上にあたる入りつ陽

この宿のガラス戸越しに畔をとぶつぐみを見つつ冬田親しき

目路はるか冬田向うに堀坂の山襞しるく風に突るも

国原の冬雲白し風の中飛行機とびて肉群しまる

昭和十八年一月例会

町中を夜汽車のすぐるいとまありてまどろむとすれ雪さやぐ

音

池に沈む緋鯉のいろにほの見えて薄氷うかび寒々しかも

昭和十八年三月例会

こぶし握り歯がみし泣きぬ荒御魂老万六千のこの御柱は
一時を冬田の畔くろの夕茜粉雪こまみだれ鴉かくるる

昭和十八年五月例会

南志摩の田井開けたり伊雑の宮神森見えて春蟬の声

入日満ち野はげんげんのさかりなり子供躍りてかへりくるか
も

年老いてひとを歎かふ直心いやせちなれば君をかなしむ（故

内海節雄君追悼）

昭和十八年九月例会

冬来れば吾に親しき蕎麦の湯の蕎麦はも白き花つけにけり

山膚はやがて紅葉もみづ出るけはひ見えつつ夕つく秀峰ほねは濃みどりに澄む

昭和十八年十二月例会

近々とけぶりのぼりてまなかひの鳥羽の八十島冬は親しき

けさの冬の真澄の空に磯山のみねの松原溶け入りてをり

けさの冬の真澄の空に磯山の並松のみどりは溶けいりてをり

昭和十九年一月例会

けさの冬の真澄の空に磯山の並松のみどりは溶けいりてをり

寒風の海の面黒しこぎいでて底の海礁いかりになまこ突く船

昭和十九年七月例会詠草

磯部先生追悼

残るなく遂げたまひけり絵に書かにことごとく光牙ひかりえたる

我生わがくるこの厳いそしさにたへかぬる朝夕ありて導みちきたまふ

磯部百三桃果はももの借り字にてげに生きぬかん百年ももとしなりしか

風格は飄々として大丈夫の翁さびすと身丈みたけ聳えし

朝鮮はたせに二十年余りて勤めしし大東亜建設の先駆ともいはんか

磯崎の巖垣道の窪間くぼまには昨きのの白雨しらたまりも涼し

磯崎の目下まるとに青く湛へたる海潮の底に横はる海礁いかり

資料九 『五十鈴』 第二十六輯 第四卷第一号 昭和十九年

一月一日発行

近 詠

壮烈清宮、納宮両大尉第一次ブーゲンビル島沖航空戦

ものふの身に二つなしあだの艦おのれ轟かみき雷かみ折さきたまふ

伊良子清白新出資料その他（阪本）

轟かみかす天つ御業と敵のふね己碎けて神沈めます

神日本千年の後も花咲くと身は裂け散りて天がけります

歌

歌よむはあそびにあらず歌よむと身ぬち激りて心振ふも

山本五十六は歌よみましき何ぞゆゆしく身もたな知らずいの

ちはてましき

ひたぶるに憤いらいほるころなげく心よろこぶころみな歌とな

河芸かはげのやこの大里いささびの軍人病いゆがにけふも歌よむ

注

資料一 同誌では募集各文種当選者の住所、氏名をまとめて発表している。そのなかに

「新鉢詩にありては、桂月藤村両先生合選の筈なりしを、

藤村先生故ありて之を辞せられ、桂月先生高選の結果は

天 京都市上長者町通〇（一字活字不鮮明）熊西入ル久下

方 伊良子暉造君の領する所となれり。」の記事がある。

署名の「S. S.」は「すししろのや」の略号か。

住所も従来知られていなかったもの。久下宅の止宿期間

は不明。短期間の模様。

なお、明治三十五年前後、『明星』『文庫』『女学世界』

に、『S. S.』『S. S. 生』『すゞしろ』と署名のある作品を見るが、内外徴証からして清白作とは認め難い。

資料二 本文は総ルビ。『むれ星』は東京中央電話局内、むれ星会発行。同誌は局長平塚運吉が配下数千の電話局女子職員（交換手等）を対象に発行した月刊文芸誌。河井醉茗が局長の委嘱をうけ、編集指導に当った。（島本久恵の醉茗日記解説による。『塔影』第一五五号、昭和四十一年一月発行）。

資料三 著者田中稲花、本名新太郎。昭和十二年没。六十六歳。『心の花』会員。『白鳥』にも出詠、清白の選評を受けた。

資料四 『蔽櫃』（いつかし）は竹柏会同人、万葉集研究者辰巳利文主宰の短歌結社蔽櫃舎（奈良県歌傍町）機関誌。

資料六 印田巨鳥。本名恵助（一八九四—一九七九）。巨鳥が中心となつて発行した三重県内歌人中心の超結社歌誌『志支浪』（津市、昭和十一年六月創刊）同十六年三月終刊）に清白は短歌、歌評等を多く発表した。その関係から、巨鳥が母追慕の小冊子発行に際し、歌を寄せたもの。

資料七 三重県鳥羽在住の大阪朝日新聞記者宮瀬規矩（落花）が、水谷嘉郎（白鳥世潮）と共に、昭和四年一月、歌誌

『白鳥』を創刊。清白は昭和六年一月号から同十七年四月

発行の終刊号まで、短歌を出詠するとともに選評を担当し、会員の指導に当った。

『白鳥』掲載の清白の短歌は、楠井不二氏「評伝伊良子清白」に大半が収録されている。その後、橋爪博氏は『白鳥』の昭和十年十一月以降の号を精査し、楠井氏が「不明」とされた昭和十四年五月、六月、七月の各号に出詠の清白短歌計十二首を紹介された。（『歯車』第九号、昭和五十二年三月、三重県立伊勢工業高等学校）。

また、山路峯男氏も、『白鳥』終刊号の題詠、雑詠各二首計四首を明らかにされた。（同氏前掲書）。

本稿ではそれ以外の未収作を収めた。

イ、昭和九年四月号の目次には「伊良子先生の分三通あり」と記されている。

詠草欄には通常題詠、雑詠共二首を出詠することになっている。しかし、清白は四月号に限って題詠煙草二首、雑詠二首の別作品を出詠している。イ、として示した各二首は題詠、雑詠とも末尾に記されていることから、さきを送った作をあきたりなく思つて、再度送ったものか、先に送ったことを失念したためか、あるいは別の事情によるものか、不明。

口、昭和九年十月号には詠草欄とは別に、冒頭部分に「祝

白鳥短歌会巻百号」と題して三首。続いて「菊の歌」五首が伊良子清白の署名とともに掲載されている。

資料八 昭和十七年一月十八日、三重県翼賛歌人会創立総会が

神宮皇學館大学で開催され、清白は副会長に推挙された。

(ただし当日は欠席)。翼賛歌人会は県内を七地区に分け、宇治山田市、度会・志摩両郡は神都地区となった。清白もこれに加わった。

資料九 『五十鈴』は昭和十六年十二月、三重県河芸郡大里村傷痍軍人三重療養所の患者が主体となって結成された五十鈴短歌会の機関誌。印田巨鳥が指導に当たった。

付記

なお、新出資料ではないが、不明とされている作品の掲載紙誌、発行年月等について補足しておきたい。

(一) 野々山三枝氏が前掲書の清白著作年表中で、「切り抜きのため不詳」とされた作品三編のうち、二編がわかった。

(1) 「文芸 春寒し『横瀬夜雨の思ひ出』」。

『伊勢新聞』昭和九年二月二十六日発行に掲載。この見出しのうち、題名は「」内の八字と思われる。『女性時

伊良子清白新出資料その他(阪本)

代』第五年第四号、同九年四月一日発行の特輯「夜雨を語る」八氏中の一人である清白の「憶ひ出」とは別内容の追悼文である。『伊勢新聞』には、さらに一月当初、清白宛

の夜雨の葉書写真版があり、昨年急逝した長女への服喪を表した「賀状をさしひかへます」の筆蹟も紹介されている。

(2) 「郷軍勇士におくる歌」

『伊勢新聞』昭和十三年二月三日発行に掲載。全五連、一連四行、七五調定型詩。

あとの一編「新春国号」は依然不詳。

(二) 「けんけん白雉」の掲載紙誌

「けんけん白雉」は山路、杉谷、野々山各氏ともに、『女性時代』第六年第一号、昭和十年一月号に掲載としている。

ところが橋爪氏は掲載紙、発行年月日不明の新聞切抜貼付の「けんけん白雉」を紹介されている。(同氏前掲書)。橋爪氏紹介の「けんけん白雉」は『伊勢新聞』昭和九年三月三日発行に掲載されたものである。つまり、「けんけん白雉」には初出『伊勢新聞』、重出『女性時代』の二通りがあること。また異同を見ると、重出作では一部が改作されている。詩句の異同を示すかわりに、両者の詩を掲げる。

けんけん白雉（初出）

けんけん白雉飛んで来い
農鳥山からとんでこい
赤石山からとんで来い
けんけんほろほろ飛んでこい

けんけん白雉脚起たす
けんけんほろほろ眼も昏れる
黄ろい蹴爪に血が滲む
紅い鶏冠は色褪せる

けんけん白雉孤り鳥
よべばこたへる空の声
春の雪間の蝦夷桜
芋環草も花咲かす

けんけん白雉（重出）

けんけん白雉飛んで来い
農鳥山からとんで来い
赤石山からとんでこい
けんけんほろほろ飛んでこい

けんけん白雉足たたす
けんけんほろほろ目も昏れる
黄ろい蹴爪に血が滲む
紅い鶏冠は色褪せる

けんけん白雉孤り鳥
啼けば答へる空の声
春の雪間の巖鏡
白鷺草も花咲かす

続き（初出）

けんけん白雉山の鳥
氷る翼の寒若鳥
高い頂雪しぶき
音はひようひよう雲の中

けんけん白雉はなれ鳥
白日恋しき番鳥
山の牢屋の巖の室
白い火をさる鳥のこゑ

けんけん白雉神の鳥
凍る現身魂燃ゆる
雲路故郷虹の国
速い日影が淡々と

続き（重出）

けんけん白雉魁魁鳥
氷る翼に空翔ける
高い頂雪しまき
音はひようひよう雲の中

けんけん白雉神の鳥
山の牢屋の岩の室
ごせる齋ひの闇の庭
けんけんはたはた忌火うつ

けんけん白雉冥府の鳥
永久の虐げ果ての日か
雲路遠空山のうへ
淡い日影がよぶやうに
— はるかに夜雨を憶ふ —

（さかもと ゆきお・鳥羽商船高専名誉教授）